

解答

一

問一 エ

問二 イ

問三 ア

問四 ワタルの父親になるには、話し方や性格までワタルの実際の父親をまねなければならないという思い。

問五 C ア D イ

問六 I かたくなに心を閉ざし、周囲の変化を受け入れないこと。

II 桜井さんを新しい父親として認め、新たな人間関係を築くことで自分自身も成長し、みんなが幸福になること。

問七 少しずつ変わっていく

問八 少しずつではあるが、桜井さんを父親として受け入れ始めていた

二

問一 a 競争 b 欠〔いた〕 c 傷 d 単純 e 典型

問二 ① オ ② ウ ③ エ ④ ア

問三 ウ

問四 〔A〕利害 〔B〕対立 〔C〕迷惑 〔D〕ア

問五 人間として根本的なこと

問六 ア

問七 それに対して「迷惑だ」と感じる人がいるという〔こと。〕

問八 他人と対立することになり、それが「迷惑」と考えてしまう〔からです。〕

問九 I イ II ウ

問十 ア

解説

一 出典は、如月かずさ『サナギの見る夢』〈講談社〉。

問一 「やめようと思う」と桜井さんに言われたワタルは、てっきり「桜井さんは母さんとの再婚をやめるつもりなんだ」とかんちがいし、「責任」を感じて「固く目を閉じて自分を責め」ます。しかし、それを察した桜井さんの言葉で「そういう意味じゃない」とわかり、拍子ぬけしたのです。

問二 「猫なで声」とは、相手をなつかせるための、優しく、こびを含んだような甘ったるい声のことです。桜井さんは、「(ワタルの) 父さんのまねをして」そのような声を出していたのですが、ワタルはそれに「全然気づか」ず、ただ「気持ち悪いと感じていた」のです。

問三 「しあわせを呼ぶ神様」である「ガネーシャ」が「壊れ」たということは、「しあわせ」を呼んでももらえなくなる、ということになります。また、「おまえさん(ワタル) この前、温子さん(ワタルの母親) がしあわせなら自分はどうでもいいとか言ってたが、それじゃあ俺が嫌なんだ」という桜井さんの言葉から、桜井さんが、自分だけでなくみんなの「しあわせ」を願っていることがわかります。

問四 桜井さんは、渚(ワタルの実際の父親)の「話し方とか性格とかまね」ることを「やめる」と宣言したことで、声が「なにかから解き放たれたみたいにさっぱり」したのです。「なにか」とは、渚の「話し方とか性格とかまね」していた原因となるものであり、それは、「ワタルくんの父親になるのなら、渚先輩みたいにならなきゃならん」という思いです。

問五 桜井さんは「猫なで声」をやめて、本音で語り始めました。それは「いつも相手の顔色をうかがって言葉を選び、必要とあらば平気で嘘をつく」ワタルの言葉とは「大違い」だったのです。したがって、空欄にはワタルの言葉の特徴と反対の意味を持つ言葉があてはまります。

問六 I ワタルは「サナギは硬」くて「殻の中で固まっている」と考えていたので、頑なに心を閉ざして自分の殻にこもり、周囲を拒絶している状態をたとえていると考えられます。

II ワタルは、「夢の中の父さんの言葉を思い出し」、成長して変わろうとしています。「桜井さんを完全に拒絶」するのをやめて新しい父親として認め、「お互いのことをもっとちゃんと、わかり合」い、「三人で、楽しく暮らしてい」こうとしています。

問七 「サナギの中では幼虫の体が一度どろどろに溶けて、成虫になるために」「変化し」ているので、この様子を三人の関係におきかえると、「ずっといっしょにいるうちに、少しずつ変わっていく」ことになります。

問八 「サナギ」が「成虫」へと「変化」していくように、ワタルも「自然なままの桜井さん」に対して少しずつ心を開き、父親として受け入れ始めています。

二 出典は、鴻上尚史『「空気」と「世間」』〈講談社〉。

問二 前後の内容から、①逆接、②換言、③理由、④添加の接続詞が入ります。

問三 『「世間」であれば、共同体の共通の目的があり』、「その共同体が何を求めているのか、はっきりとして」いるので、「何が迷惑となるか、よく分かる」と述べられています。

問四 「ビジネスとは、お互いの対立する利害を調整しながら、相互に利益を生もうとする活動」で、『「迷惑」』となるかどうかは、お互いの欲望をぶつけてみないと分からない」とあります。また、『「迷惑」だと相手が考えていると分かったら調整すればいい』とも述べられています。ビジネスにおいて「利害」(→A)は「対立」(→B)し、「迷惑」(→C)となりうるが、それをお互いに「調整」する、つまりお互いが「納得」(→D)する方法を見つけないとすることが、大切になるのです。

問五 「人であればだれもが認めざるをえない当たり前のこと」について述べられている部分をさがしましょう。「相手をキズつけるとか、人のものを盗むとかの話ではないですよ。そんな人間として根本的なことを言っているのではありません」という部分から、「人間として根本的なこと」をぬき出して答えます。

問六 前後の文脈から判断しましょう。前の部分で、「他人に迷惑をかけない人間になってほしい」という「願いは、テンケイ的な日本人の考え方」であり、「欧米で、この言葉を使うと」、「まったく理解できない」などと言われるということが述べられています。また、後の部分では、『「異文化の中でどうやって生きていくか」』ということが求められている」とあります。つまり「何が迷惑になるか分からない人たち」とは、自分とは異なるものの考え方や感じ方をする、「異文化」の人たちなのです。

問七 前者の意見「落書きは、社会の迷惑である」と、後者の意見「落書きを責めるのなら、街の空間に乱立する商業看板を問題にしないのはおかしい」とをよく見比べてみましょう。後者の意見は、前者の意見を受けて述べられているものであり、その意味を補って言い換えると、「社会の迷惑であるという理由で落書きを責めるのなら、街の空間に乱立する商業看板だって、同じ理由で責められるべきだ」ということになります。街中で乱雑に立ち並んでいる看板は、否応なく人々の目に飛び込んでくるものです。人によっては、その看板にかかれた言葉や絵を不快に感じてしまうかもしれません。社会全体とはいかないまでも、「商業看板」を「迷惑」だと感じる人はいる。その点では、「商業看板」だって「落書き」と変わらないじゃないか、と後者は主張しているのです。

問八 「子供の頃から『他人に迷惑をかけない人間になれ』と言われ続けた人」は、「自分のやることが『迷惑』になるのかどうか、常に考え続ける」こととなります。つまり、他人の「迷惑」になるのを避けることを第一に行動するのです。しかしながら、今は人々が「何を求めているのか、何を嫌がるのか」が分からない上に、「自分のやりたいことをやる時、他人とぶつからない」ことがない時代です。「他人とぶつか」り、そこから「交渉」していく、それが今のコミュニケーションなのですが、「子供の頃から『他人に迷惑をかけない人間になれ』と言われ続けた人」は、「他人とぶつか」ること(=「対立」)を他人の『「迷惑」』と考えてしまうため、「他人との接触」自体を避けてしまうのです。

問九 まず、今求められている「相手とちゃんと交渉できる能力」とは何かを考えます。前の部分に「自分のやりたいことをやる時、他人とぶつか」った場合に、「お互いが正当な主張なら、そこから交渉が始まる」とあることに注目しましょう。ビジネスの例で、「自分の活動や欲望が、相手の『「迷惑」』になるかどうかは、実際にぶつかってみないと分からない」とあり、『「迷惑」』だと相手が考えていると分かったら(利害を)調整すればいい』と述べられていることから、「相手とちゃんと交渉できる能力」とは、相手との利害や意見の食い違いを「調整」する能力だとわかります。次に、「相手を思いやる能力」とは何かを考えます。「求められるのは、『相手を思いやる能力』ではなく」とあるので、求められていない能力について書かれている部分を本文中からさがしましょう。「日本では～自分のやる事が『「迷惑」』になるのかどうか、常に考え続けることが求められます」とあり、「けれど、今は違います」と続いているので、「相手を思いやる能力」とは、「自分のやる事が『「迷惑」』かどうか」判断する能力ということになります。

問十 「相手とちゃんと交渉できる能力」がないと、「他人とぶつか」ることを恐れて、「他人との接触を避けるようになって」しまう、すなわち、他人に対して「よそよそしい距離」をとってしまうのです。